九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「あはれ」の再検討 : 中世歌僧の論を兼ねて

井手, 恒雄
福岡女子大学教授

https://doi.org/10.15017/12370

出版情報：語文研究. 4/5, pp.52-57, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「あはれ」の再検討

―中世歌僧の論を兼ねて―

井手恒雄

一

私は西行とか慈円とかいう人に関心をもち、その作品のあれこれを調べているうちに、興味のある事実に気づいた。

それはいわゆる「あはれ」乃至「もののあはれ」の論に関係のあることであるが、そのような中世の歌僧とよばれる人たちが月雪花の「あはれ」をめでたとかめでなかったとかいうことに関して、現代人の常識に大きな誤りがあるのではないかということである。普通に「あはれ」とか「もののあはれ」とかが話題にされるとき、その根底に、昔から日本人ほど自然を愛する国民は無く、古来花の「あはれ」を愛し月の「あはれ」に感じることがその人の教養の高さを示すものであったという、仮定があった。時にはその古人の教養の美しい伝統を今日に伝えるのが、国文学者の主な任務の一つであると信じる向きもあった。ところでほんとうのところ「あはれ」（「もののあはれ」）とは何であろうか。そういうものの関するかぎりにおいて中世歌僧の現実は、果してどのようなものであったろうか。

何よりも、昔の日本人にとって月雪花の「あはれ」を感じることがその人の教養の高さを語るものとして重んぜられたときめてかかるのが、根本的な誤りであるように私には思われるふしがある、それについてできるだけ実証的に論じてみたい。実証的にというのは、そういう誤った先入主がまず以て西行とか慈円とかいう人の作品の解釈をゆがめている、というよりもとんでもないものにしていると思われるところがある、そういう事実に関連して、抽象的な「あはれ」（「もののあはれ」）論ではなくて、作品の表現に忠実な議論をしてみたいと思うのである。

二

とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人はをりにこそよれ

これは新古今集・春上に見える西行の歌であるが、今日新古今の代表的な注釈書として重んぜられる『新古今和歌集評釈』（窪田空穂著・以下『評釈』と略称）に次のようにいう。

「題しらずであるが、知人に寄せた消息の歌と見える。そしてその知人は、目下の遠慮のいらない人であつたらしいことが、歌から察しられる。作者は平生、その人の疎遠にしてゐるのを恨んでゐたのであるが、たまたま梅の花が盛りになつた時、それを見に来ないことを口実として、その恨をいつたのだと見える。『疎きも人はをりにこそよれ』は恨というよりもむしろ罵に近い。その罵をさせたのは、その人が梅の花を愛でようとする心のないのは、当然罵に値したものだとして敢へてしてゐるのである。艶を重んじた当時の時代の思はれるところがある。」

これによると、西行には親しい間がらの目下の人があった。その人は平素から西行のもとに寄りつかず、西行としてはそれを恨んでいた。たまたま梅の花盛りにも訪ねて来ないので、西行はこの梅の風情をめでようともしないとは何という不届きな人間であろうと、恨みというよりむしろ罵りに近いことをいってやったというのである。それが艶を重んじた当時の人のふるまいらしいというのである。

果して西行は、相手が梅の「あはれ」を解しないのを恨んだり罵ったりしたのであろうか。私が問題にしたいのは、当時の人が艶を重んじたとか梅花の風流を愛するのがその人のゆかしさを意味するものであったとかいうのが、この歌からもそういえるということがらなのか、それとも、そうであったからこの歌においてもそうでなければならないという、いってみれば現代の注釈家の主観から出たことなのであるか、である。

私は、この歌は「あはれ」を解しないのを非難するというようなものでは決してないと思う。思うに西行は世間との交りを断って草庵に行いすまさねばならぬ遁世者である。人の訪れを厭わねばならぬ身である。しかもそれだけに人間恩慕の情は強い。折からの梅の満開に寄せて、あなたが訪ねて下さらないのも折によることで、この花盛りには是非立ち寄って下さいと、真情をこめてよびかけたものと見るべきではあるまいか。

『評釈』より時代の古い（というのは私としてはすべてを「もののあはれ」で片附けようとする風潮の盛んにならない以前のという意味であるが）『新古今和歌集詳解』（塩井正男著・以下『詳解』と略称）に「幽かに住める宿にて、常には人は疎々しきなれど、かばかりに梅の花の面白き今日

此の頃に訪はぬことやある、いかに疎きも時節場合によるものぞといふ意に解くべきにこそ。」というのが正解に近いと思われる。

「とめこかし」の歌境に通うものを拾うと、同じ歌僧の部類に入る寂蓮の歌に—

山ざとはとはれむとやは住みそめし音せぬ人をなにうらむらむ　（続後拾遺和歌集）

これは、こうして山里に住んでいると訪ねてくれる人もない、だが訪ねてくれない人をなんで恨もうか、人から訪ねて貰おうと思って山里に籠ったわけではなし、というのであるが、山里を訪うてくれぬ人をなんで恨もうかという言い方で、心中の堪えがたい思慕の情を一層切実に表現したものである。宗教的＝禁欲的な当時の環境において、生まるべくして生まれた「詩」であると思われる。西行の歌はこれと全く同じ発想のものであると思われるが、もしそうであれば『評釈』の、梅の風情をめでようともしない人を恨むとか罵るとかいうのはどうなるのか。それは所詮、何か昔の人が艶を重んじたとか「あはれ」を解しない人が軽んぜられたとか、総じていえば国文学といえばすぐ「もののあはれ」だと、きめてかかる誤った先入主がわざわいして、原作にないものがつけ加えられる（ということはつまりそれがゆがめられることであると思うが）例の一つということになるのではなかろうか。

× × ×

庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらむ

これは慈円の歌で、新古今集・冬に見えるものである。『評釈』に曰く、「我が山家の庭の雪に、我と我が足跡をつけて出懸けたのを、人に訪問されての足跡であると、第三者は見るであらうか。一首、雪のあはれで、実境のものと見える。『我が跡つけて』は、雪のあはれを思ひやつて、外に出る心である。『訪はれにけり』は、同じく雪のあはれを共に見ようとする人を思ひやつての話で、さうした思ひやりをした人も、同じく雪のあはれさを知つてゐる人である。その総てが余情とされてゐる。『庭の雪に』といつて山家を暗示してゐるのも、同じく余情である。」と。

この『評釈』の説によると、慈円は折からの雪に「あはれ」を感じて、我と我が跡をつけて外へ出た、人によっては、同じく雪の「あはれ」をめでる風流の士が雪の上に足跡をつけて慈円を訪うたかと見るかもしれない、そう見る人もまた「あはれ」を解する人ではある、というのである。

これも私は誤解であると思う。これでは前と同じように、世間から遁れ訪客を断って修行に励む人の心情のあわ

れさ（「あはれ」というような言葉はそういうものをあらわすものでなければならないと思うが）が全く見落されることになる。私は『詳解』に従いたい。

「我が庵は誰一人訪ひ来るものなければ、此の庭の雪にとざめたる足跡も、よその人のではなく、我が庵を出づるとてかくは雪に跡をつけたるなるを、さうとは知らずして誰かに訪問せられたりと人は思ふであらう。訪はれもせずしてさやうに思はるゝはくちをしやとなり。独り淋しく住む我が幽居、絶えて訪ふ人もなきを恨む愚痴、一寸おもしろき意匠なり。」（『詳解』）

これによると、慈円は雪を踏んで外へ出た、自分の足跡を見てふと彼は、草庵独居の自分に訪問者があったのかと人から怪しまれるかもしれぬと歎息した、というのである。

『評釈』の次のような評はどうであろうか。

「詳解は一首の余情として『訪はれもせずしてさやうに思はるるはくちをしやとなり。独り淋しく住む我が幽居、絶えて訪ふ人のなきを恨む愚痴、一寸おもしろき意匠なり』といつてゐる。これは当時の人の詩情ではない。かうした解は、当時の人の心外とすることであらう。」

こちらの方が誤解である。それは当時の出家者というものの立場を十分に認識しないための誤解である。慈円の歌には出家者として人に訪われることを神経質に気に病む気持と、草庵を訪う人のあれかしと願う心との複雑な錯綜があり、それが彼の詩情を成している。それが気づかれていないだけではない。彼が雪を踏んで外に出たのは何の用事があったのか、この歌の解釈としてはそれほどの必要はないと思われるのに、それが雪の「あはれ」をめでるためであったと、無用な強調がなされているのである。

三

これは当時の詩情ではない、という言い方で『評釈』が『詳解』を非難したが、その非難が当っていないばかりではなく、その非難を通じて学としてのいわゆる国文学の方法論的な欠陥が暴露されていることに注意したい。思うに、ある歌を吟味した上で、この歌からこういうことがいえると主張するのはよい。そのような主張なり提唱なりの蓄積こそ、われわれの求める日本文芸に関する学問の真理を形づくる。が、ある時代の詩情はこうだとあらかじめ想定した上で、だからある歌の意味はこうでなければならないと断定するのは正しくない。その想定は往々独断に堕する。

花が咲けば花をめで、雪が降れば雪に興ずる、というのが日本の詩情であり、西行や慈円の作品の基調をなすもの

も、そういう詩情であったろうという想定は、どのような意味で独断なのであろうか。西行の「とめこかし」の歌には、相手が梅の花の「あはれ」を解しないのを非難する気持はない。慈円の「庭の雪に」の歌には、雪の「あはれ」に心をおどらすという気持が特にうたわれているわけではない。ところでこれらの歌にそういう気持がないということは、これらの歌にそういう気持はないが西行とか慈円とかいう人自身に、歌とは別にそういう気持がなかったとはいえないということなのであろうか。それには、次のような歌がある。

花に染む心のいかで残りけむすてはてきと思ふわが身に　（千載和歌集）

月かげに雪かきわけて見る梅の白きにもなほ染む心かな　（拾玉集）

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれ眺めてけりなうらめしの身や　（新古今和歌集）

はじめの一首は西行の作で、人生の執着は断ってしまったと思うわが身なのにどうして花に惹かれる気持が残っているのであろうか、の意。花に惹かれる気持をさも厭わしそうにいうところに注意しなければならない。花の「あはれ」というようなものがあるとすれば、西行は遁世者としてその花の「あはれ」をめでるというのでなく、逆に厭うたのである。次の一首は慈円の作で、「梅の白きにもなほ染む心かな」は、月夜の雪に映える白梅に惹かれる心がいわゆる「染汚」（仏語・煩悩の別称）として、自己の未熟の証として、恥じられている。これも月雪花の「あはれ」に興ずるというのではなく、逆にそういうものに心惹かれることを恥じるというのである。次も慈円の作で、春が訪れて庵のあたりに桜が咲き匂うのは仕方がないが、出家の身でそういうものに眺め入るとはわれながら残念なことであった——。ここでも出家の身としていわゆる「あはれ」を感じることが恥じられている。つまりこれらの歌から考えられることは、西行とか慈円とかいう人においてはいわゆる月雪花の「あはれ」が禁忌されたということであり、したがって単に観念的ないわゆる「あはれ」を彼らの作品の基調であり当時の詩情であると考えるのは、文芸史の真実を誤る基であるということである。

かぎられた紙面ではただ要点（というよりもむしろ端緒）を語るにとどまるが、私は中世の作品の客観的解明につとめるにつけて、現代（昭和に入ってから）の「もののあはれ」論のわざわいの甚だしさを思わずにはいられないのである。国文学が「あはれ」や幽玄、「わび」や「さび」ばかりで片づけられてはならないという声は早くからあったが、今日どのような誤解と混乱とが実際古文芸の世

界に持ちこまれているか、徹底的に究明されていない。それはたしかに中世歌僧の作品にまといついて、人を迷わせている。西行とか慈円とかいう人の歌のそれぞれの意味ぐらい、その歌自体の語法・語調からわかりそうなものであるが、実はそうではない。「もののあはれ」論のわざわいといわざるをえない誤った先入主が一つ一つの歌の解釈に悪く作用する。悪循環ということばがあるが、思うに現代の「もののあはれ」論には一部分に実証に基づかぬ架空のものがあり、それが中世の歌僧の作品にからみついて、彼らは「あはれ」を尊んだはずだから歌の意味もこうでなければならないということになり、当時の歌僧の現実は歌そのものからみてこうであり、したがって「あはれ」に関するそのような理解の仕方は誤りであるということが、容易に理解されぬもののようである。

ここで十分実証する余裕が無いが、さらにこうもいえるのではないかと思う。

西行や慈円は世間を遁れた。だから彼らの詩情といえば社会から切り離された観念の世界から生まれたものであるように考えられる。ところが実際は「捨てて捨てえぬこころして」などとうたわれたように、世間から離れ得るものではなかった。彼らの歌はそれ自体が一度は捨てたはずの世間との或るつながり方を示すものであった。一方現代の「もののあはれ」論はそれ自体が社会的性格を欠く昭和の国文学の落し子であった。その「もののあはれ」論が支配的であるところでは、そのような歌僧のいささかの社会性も見落されて、ただ「あはれ」という観念的なものがそういう人たちによって重んぜられたと想像されたのも仕方ないが、それはたしかに「もののあはれ」論（それは宜長の提唱の際はある重要な意味をもったと思うが）と中世歌僧の文芸の双方にとって、不幸を意味するものであったと思われる。

（昭三一、九、二）